

いの流水俳壇

「当季雑詠」

間 浩太 選

燕来る津波に去年の軒端無く

大川 節弥

(評)東日本大震災の津波で、家屋の流失あるいは破壊され、人間だけでなく鳥や獣・虫なども巣などを失っている。春、暖かい南方から飛来し、人家の軒端に巣を営み、子燕を育て繁殖し、秋、南方へ帰って行く。

翌年春、去年の巣へ帰来したが津波のため、旧巣は家屋とともに消失していたのである。

巣のなくなった燕はどうしたか、津波の被害を受けなかった人家も、福島第一原発事故の放射性物質の拡散地には、巣を作ることはいできない。しかし、燕には、放射性物質の危険地など、分らないので哀れである。作句者の大川さんの、津波により巣を失った燕(他の動物も含めて)へのやさしい気持ちが見とれる。

山椒和え二人の膳に香を流し

井上 郁子

(評)山椒は三月・四月に芽吹き、葉は小さくて柔らかく香気が強く食用となり珍重される。

山椒和えは、芽吹いた葉を和えたもので春の旬の珍味と言える。この句の作者井上さんは、ご夫婦だけの生活であり、いろいろの料理に精通して上手である。

香気の強い山椒和えを食膳にのせ、香りを楽しみながらの食事、幸せなお二人の暮らしが偲ばれます。

仁淀川紙のこい見しこどもの日

森岡 照月

(評)こどもの日、五月五日。子どもの人格を重んじ、子どもの幸福をはかる日。いの町の国道33号の仁淀川鉄橋の上流側に、不織布で作った赤・青・黒など色鮮やかな大きなこいのぼりを水中に泳がすのが、こどもの日の前数日間のイベントです。水中だけでなく、陸にもこいのぼりを多く泳がしたので、見物人も多く、カメラマンも多数来場していた。この句の作者も、上手なカメラマンであり、多くの撮影をしたと思われる。

全国で川渡りのこいのぼりは多いが、水中を泳がすのは珍しい行事である。

春愁や両手両足リハビリス

弘瀬うき子

(評)一陽来復の春は、自然も生活も明るく活気に満ちてくるが、その反面にふつと哀愁を覚え、もの悲しさにおそわれる。憂鬱・悲哀といったはつきりしたものではなく、春先に感じる淡い感傷が春愁である。この句の作者は、九十歳を超え、流水俳壇では最年長であり、たゆまず作句されているのには、敬服せずにはおられません。両手両足のリハビリができるのは、まだお元氣な証拠で、高齢になると手足を動かさずに、じっとしている人が多いですが、少しぐらい具合が悪くても、手足を動かしているのが、元気で過ごせる理由だと思います。まだまだお元氣で、佳句をお作りください。

居こちを秘め胡蝶蘭咲き始める 田島恵美子

平凡に生きて仕合わせ豆の飯 小野川町子

みどり児の肌が笑ふよ風五月 岡本とも子

山畑に飽きぬひとりの薄暑かな 竹崎 光子

打ち解けてポトルに甘茶分け合えり 川村 博子

万緑の底で足湯につかりけり 刈谷 志津

夜の新樹恋占ひの付け睫毛 植田 紀子

散る花に巻き戻せない砂時計 野田 京子

身になふ程の遠出や柿若葉 伊藤 萩甫

杖とれて歩数伸ばすや椎の花 友草 水月

挨拶もなくつばくらめ卵抱く 津田 久美

嬉しげに子の名はためく幟かな 岡村 嘉夫

黄砂降る異国の鬱を連れてくる竹崎たかひろ

たそがれて老鶯の声峡に聞く 筒井 正子

無住寺や野生が育つ獣と樹木 松尾満津於

津波あと残る一樹の芽吹きけり 間 浩太

次 題 「当季雑詠」五句
締め切り 毎月五日

投句先

社会教育課

いの町3597
893-2012

今月のこども川柳

新学期 たん任誰かな ドキドキだ
川内小5年 金子明香里

学校の ぜんうじどう 十九人
長沢小2年 増井さくら

さくらさく あなたのほほも さくらいろ
川内小5年 野口 朱莉

わたしはね ゆめがいつば あるんだよ
川内小3年 越智 美空

かみなりは ぶつぶひびく すいおと
長沢小1年 やまさき こうき

あめさんは ぼろぼダンス おどてる
川内小3年 宮脇かりん

すいせいの ラバはずく おもしろ
長沢小3年 山中 大和

やせがえる どうしてそんな 体なの
川内小2年 おかむら りん

春が来た さくらも花も わらってる
川内小3年 川村万里子

一年生 けんかもおおい なかよしよ
長沢小2年 川村みずほ

※「こども川柳」は町内全小学校の児童の皆さんを対象に募集しています。次回提出締め切りは7月20日(水)です。たくさんの皆さんの応募をお待ちしています。(応募は各小学校を通じてお願いします。)*選句は、川柳連会の皆さんにお願いしています。